

Ruskinism Oscarised

井村 君江

(協会会長・明星大学教授)

Oscar Wilde が Walter Pater の特に *Renaissance* 論の影響の下に、印象を重んじる審美批評をうちたて、Epicurianism の人生観を説いたというのは通説になっている。だが初期の Wilde、即ち Oxford の Magdalen College の学生時代 (1874-79)、及び渡米し帰英した前後の講演活動の時代 (1881-84)、*The English Renaissance of Art; House Decoration; Art and the Handicraftsman; The House Beautiful; The Value of Art in Modern Life; More Radical Ideas upon Dress Reform* 等の室内装飾論や服装論、手工芸論等生活の美化を唱える一連の講演や1891年の *The Soul of Man Under Socialism* の社会改良論を基にした講演等には、John Ruskin の影響の方がより強く込められるようである。それらは、いわば *Oscarised* (*Ostracised* を含めて) とでも言えるような強引な Ruskin の理論の摂取、解釈の仕方である。

20才の学生 Wilde が、ダブリンの Trinity College から Magdalen College の Kitchen Staircase の部屋に移ったところ、Oxford では50才の Ruskin が美術の Slade 教授として、シエルドニアンの大講堂にあふれる学生の前で、荒野に叫ぶ予言者のような熱の籠った講義をしており、30代の Pater は哲学者のように少数の学生を相手に思索的な考えを話していた。Wilde が聴講したであろう Ruskin の講義は "*Lectures on the Aesthetic and Mathematical Schools of Florence*" (1874) 及び "*Lecture on Sir Joshua Reynolds*" (1875) で、"*Studies in the History of the Renaissance*" (1873) の講義は終っていたようである。ある時、低く一人言のようにしゃべっていた Pater が、"I hope you all heard me" と言ったところ即座に Wilde が "We over heard you" と答えたというのは伝説になっているが、Wilde が Pater の講義について書いたものは残っていない。これに対して *Modern Painters* や *The Stones of Venice* の著者の講義には出席しており、そこから受けた感銘は、Ruskin その人に宛てた手紙や母 Francesca の手紙などから窺うことが出来る。

"These is in you something of prophet, of priest, and of poet", 予言者、説教者、詩人と、Ruskin を讃え、神の啓示によるような情熱的の弁舌と賞め、「音楽的な貴方の声は、聞こえぬ者の耳にも響き、盲いの者の目をも見させる力がありました。」と讃美し、彼から学んだものは宗教的な善の教え ("nothing but what was good") に外ならなかった、と Wilde 特有の美辞を並べて書き送っている。その手紙の一節に "the dearest memories of My Ox-

ford days are my Walks and Talks with you" という一行があり、この言葉をそのまま母の Francesca に書き送ったらしく、息子が Ruskin と "Walks and Talks" していると母は得意気に友人宛ての手紙に書いており、Wilde 一家にとっての Ruskin の大きさが窺える。

この "Walks and Talks" には更に Ruskin との "Works" が重っているのであるが、それは Oxford 郊外の Upper と Lower の Hinksey 村の間の沼地を埋める道路工事の勤労奉仕という "Work" である。Wilde はアメリカで行った「芸術と工芸職人」と題する講演の中で、Oxford の冬に霧と雨と泥の中で、Ruskin と共に村の人のために労働を行い、この人生の高い理想に向かって若い情熱を傾けた経験は、英国の面目を一新できるような芸術運動を起こすことさえできるという確信を得させてくれたと語っている。学生であった Andrew Lang や Arnold Toynbee もその場にいたのであるが、果して彼らと一緒に Wilde がシャベルを持って何日間労働に従事できたかは不明である。しかしとにかく、孤独裡に Aesthetic Contemplations を重ねていた Pater のブレスノーズ・カレッジの一角に共に閉じ籠らず、それと対称的に泥にまみれ陣頭指導をとって社会のために Practical Aestheticism を行っていた Ruskin に共鳴し、勤労奉仕作業に参加したこの時の学生 Wilde は、少くとも審美主義実践派であったといえよう。

興業主ドイリー・カートがギルバードとサリバンの Wilde を諷刺的に書いたサヴォイ・オペラ『ベイシエンス』宣伝に彼を渡米させ、各地で前述の講演を行っていた1882年のある日、ニュージャージーのフェリーから降りて車に乗り込んだ Wilde が、葉巻をつけやおら開けた雑誌は、*Fors Clavigera* であった。これは Ruskin が1871年から14年間、96冊発行した個人雑誌で、St. George Guild の理論と成果報告とを含む社会改良論集とも言えるものである。この雑誌が Wilde と共にイギリスから海を渡りアメリカ各地を Wilde と一緒に旅していたことは、かれの Ruskin への傾倒ぶりを示すものであろう。An art made by the hands of the people to please the heart of the people too" と手工芸を高く評価したり、"What is decoration but the worker's expression of Joy in his work" と装飾も労働者の喜びの表現であると言う所など、Ruskinism 信奉者 Oscar の面目が窺えるのである。

1891年、Barnard Shaw と共にウエストミンスターで開かれた社会主義の演説会で、Wilde は勧められるままに「社会主義下の人間の魂」を話す、社会改革を目指していた Ruskin の資本主義社会批判と、人間性を重んじる理想主義社会への期待を唱える Ruskin の説にうながされた感がある。ヴィクトリア朝社会の不平等の弊害をなくす為、私有財産制の撤廃を主張する Wilde の講演には、ジャイルズ訳の荘子の虚無思想や無政府主義の考え方もはいつているかも知れぬが、私有財産を廃止し、人間性を尊重し他を愛するという主張は、Ruskin が *Fors Clavigera* で説いている中心思想である。ただし Ruskin の理想とした社会、当時 Ruskin が St. George Guild を作って実践しようとした「労働の喜びに

依り、隣人愛に基づいて讚美と幸福のうちに生活できる社会」というものは、雑誌 *Fors Clavigera* が Workmen and Labourers of Great Britain 宛書簡であったように Common People (民衆) のためのものであった。しかし Wilde の言う理想的社会とは、個人の才能を十分に発揮できる社会のことであり、才能ある個人とは、とりも直さず Genius People 才能ある人々 (真の芸術家) を意味している。「真の芸術家は民衆など気にもとめない。民衆は彼にとって存在しないのである。」という結論を出している Wilde は、Ruskinism を Ostracised しており、Ruskin の Aesthetic Socialism はここに至って Aesthetic Individualism に変貌し、Ruskin の博愛を説く Christianity は、自己愛を説く Paganism と化している。「社会主義下の人間の魂」の最終行で Wilde は言っているのである。「新しい個人主義とは、新しい異教主義である」と。

日本ワイルド協会夏期セミナー

『ワイルドをめぐる人々——その美意識の系譜——』

第1日 7月4日(土)午後2時～6時
 司会 岩崎 光洋 (玉川学園女子短期大学専任講師)
 挨拶 井村 君江 (協会会長)
 講演 「観て想う——ラスキン、ペーターからワイルドへ——」
 沢井 勇 (実践女子大学教授)
 「ワイルドとモーム」
 佐藤 喬 (慶応大学教授)
 (懇親会 午後7時より交友館にて)

第2日 7月5日(日)午前10時～12時
 シンポジウム 「ワイルドをめぐる人々——その美意識の系譜——」
 ——ラスキン、ペーター、ワイルド——

司会 玉井 暉 (大阪大学助教授)
 発題者 都築 佑吉 (群馬大学教授)
 井村 君江 (明星大学教授)
 日時 昭和62年7月4日(土)、5日(日)
 場所 八王子大学セミナーハウス 中央セミナー館

日本ワイルド協会

講演と研究発表の会

挨拶 井村 君江 (明星大学教授・日本ワイルド協会会長)
 講演 「芸術家としての批評家——ペーターからワイルドへ」
 富士川 義之氏 (都立大学助教授)
 研究発表 (1) 「pleasure が大切——『真面目が大切』試論」
 佐藤 真二 (駒沢大学大学院生)
 (2) 「ワイルドの初期の詩について——“Theoretikos”を手がかりに」
 岩永 弘人 (東京農業大学専任講師)
 閉会の挨拶 川崎 淳之助 (立教大学教授)
 司会 堀江 珠喜 (園田学園女子大学助教授)
 日時 昭和62年12月19日(土)午後1時30分
 場所 立教大学 セントポール・ハウス (JR池袋駅下車)